

## 釧路市街地周辺のカラスのねぐらについて

貞國 利夫\*

### はじめに

鳥類におけるねぐらのとり方は様々であり、水辺で寝るカモ類がいれば、地上で寝るキジなどもある。カラスは樹上で寝るタイプで、群れて寝る習性をもつ。

群れて寝るメリットはいくつか考えられる。一つは捕食者対策である (Beauchamp 1999)。フクロウ類やキツネやネコなどの中型哺乳類はカラスの天敵だが、群れることで単独よりも早く捕食者を察知することができるだろう。他にも、ねぐら内において個体間で餌情報を共有する等の情報センターとしての役割もあるとされている (Marzluff, J.M. *et al.* 1996)。

カラスは鳥類の中でも比較的大型であり、食性も雑食のため、餌とする哺乳類～魚類、植物の種子、さらにはスカベンジャーとしての役割など、生態系への影響は多岐にわたる。よって、カラスの個体数を把握

し、他地域と比較することで、地域資源や環境を評価することが可能と考えられる。

今回は、釧路市街地周辺のねぐらの位置を把握し、特に春採湖のねぐらについては正確な個体数を押さえ、カラスから釧路の環境について考察した。

### 調査地・方法

調査範囲は旧釧路市の行政区を中心とし、釧路町の岩保木山周辺の丘陵地も含め、調査面積は約300 km<sup>2</sup>とした。対象種は釧路で周年観察されるハシブトガラス (*Corvus macrorhynchos*) とハシボソガラス (*Corvus corone*) とした。カラスのねぐらは季節ねぐらと周年ねぐらの大きく2つに分けられ、季節ねぐらは夏だけ、もしくは冬だけ使用するような一時的なねぐらであり、周年ねぐらはその名の通り、1年中使用されているねぐらのことを指す (中村 1993)。

筆者が知る限り、釧路市街地周辺には計4つのねぐらがあり、概要は以下の通りである。なお、位置については図1を参照したい。

#### 【ねぐらA 春採湖】

ねぐら：周年タイプ 規模：1,000羽以上～ 形成時期：2000～2005年 備考：地元住民へ聞き取りを行うと、当初は小規模ねぐらだったが徐々に増えてきたとのこと

\*釧路市立博物館

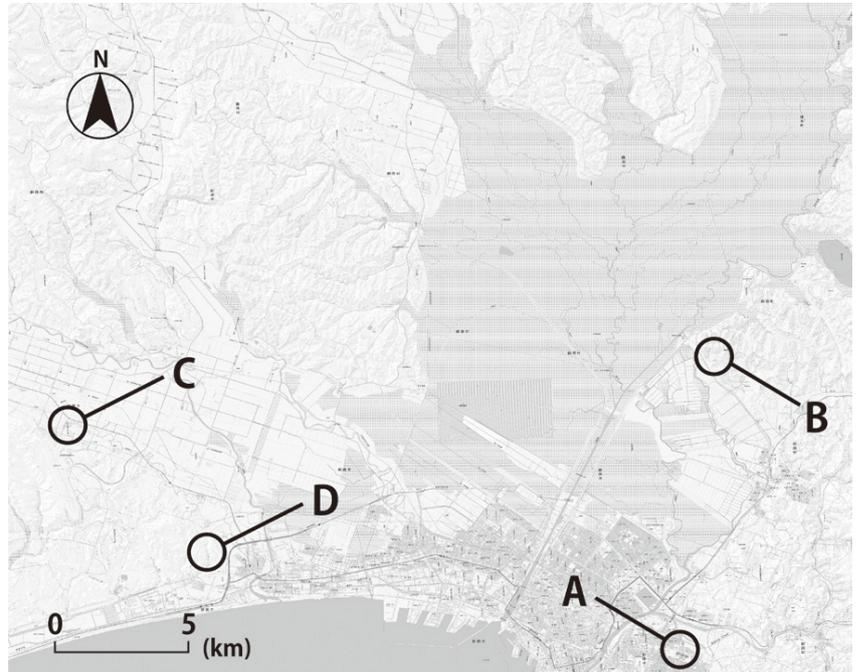


図1. 釧路市街地周辺のカラスのねぐら位置 (地理院地図を利用して作図)

#### 【ねぐらB 岩保木山】

ねぐら：季節タイプ 規模：数100羽 形成時期：不明 (2018年以前) 備考：冬季のみ利用され、過去1,000羽前後記録されたこともあるが、通常は数100羽単位である。

#### 【ねぐらC 釧路市丹頂鶴自然公園そば】

ねぐら：周年タイプ 規模：数100羽 形成時期：不明 (2018年以前) 備考：小規模だが周年の利用が確認されている。なお、同地はトビのねぐらにもなっている。

#### 【ねぐらD 大楽毛丘陵】

ねぐら：季節タイプ 規模：数100羽 形成時期：不明 (2018年以前) 備考：冬季のみ利用される。位置は年によって数百m単位で変わるが、概ね大楽毛の丘陵地をねぐらとして利用している。

一年を通し、冬季はねぐらの数が集約されるため、地域内の個体数を把握しやすい (倉田ら1972)。そこで、ねぐらA～Dにおいて、冬季に最も個体数が多いねぐらAの春採湖にて、以下の通り個体数を把握する調査を実施した。調査日：2024年2月4日、10日 時間帯 (両日共)：15時～17時15分 天候 (両日共)：曇り

調査手順：

①ねぐらの春採湖へ飛来するカラスをカウントするため3つの定点 (鶴ヶ岱側2つ、春採湖南側1つ) を設定し、1

定点当たり2名以上(カウント役と記録役)で実施

②目視及び8~10倍の双眼鏡を用い、上空を通過したカラスを数え、可能な限り種類を識別して記録。

**結果(ねぐらA春採湖)**

**2月4日**

鶴ヶ岱側 2,350羽 春採湖南側 453羽 合計 2,803羽

内訳) ハシブトガラス187羽 ハシボソガラス369羽 種不明カラス 2,247羽

**2月10日**

鶴ヶ岱側 3,370羽 春採湖南側 282羽 合計 3,652羽

内訳) ハシブトガラス137羽 ハシボソガラス263羽 種不明カラス 3,252羽

※ねぐら利用範囲は図2参照。



図2. 春採湖のねぐら入り調査結果

スが好む農耕地的環境があるためこのような結果になったと考えられる(吉田ほか2006)。

**謝辞**

本調査は以下の方の協力のもと実施することができました。心より御礼申し上げます。  
石下亜衣紗、関根琢実、関根直美、高島優、永澤広治、樋田宏三郎、松本香、松本文雄(50音順、敬称略)

**参考文献**

Beauchamp, G. 1999. The evolution of communal roosting in birds: Origin and secondary losses. *Behav. Ecol.* 10: 675-687.

Marzluff, J.M., B. Heinrich and C.S. Marzluff. 1996. Raven roosts are mobile information centres. *Anim. Behav.* 51: 89-103.

北島信秋・黒田長久. 1993. 千葉県北西部におけるカラスの冬季時の分布と就峙個体数. *山階鳥研報.* 25: 54-61.

倉田篤・樋口行雄. 1972. 三重県におけるカラス科2種就峙行動. *山階鳥研報.* 6: 89-106.

中村純夫. 2003. カラスの季節ねぐら—いつ、どこにどれだけ—. *Strix.* 21: 177-185.

北海道新聞社. 2023. 札幌のカラス20年で半減. *北海道新聞.* 2023年6月30日朝刊.

吉田保志子・百瀬浩・山口恭弘. 2006. 農村地域におけるハシボソガラスとハシブトガラスの繁殖成績とそれに影響する要因. *日本鳥学会誌.* 55(2): 56-66.

**考察**

春採湖の調査結果及び周辺のねぐらの個体数から、釧路市街地周辺には約4,000羽のカラスが生息していることが明らかになった。4日と10日の個体数の結果について800羽ほど差があるが、調査員の習熟度や当日の総ねぐら入り数の変化等によって生じたと考えられる。ねぐらへの進入方向は大きく分けて2つあり、中心は鶴ヶ岱側からであった。これは、春採湖をねぐらとするカラスの多くは釧路の北西部側から侵入することを意味し、同時に冬季における釧路市街地周辺のカラスの多くは、北西部を餌場に行っていることを示唆する結果と考えられる。

北島ら(1993)によると、千葉県北西部の面積約706.5 km<sup>2</sup>の中で計6,800羽のカラスが生息していた。また、札幌カラス研究会などの調査では、札幌市(面積1,121 km<sup>2</sup>)とその近郊において、7,000~4,000羽の調査結果があり、近年は4,000羽を切っている(北海道新聞社2023)。各調査地の環境特性に違いがあるため一概に比較はできないが、釧路のカラスは他地域に比べると、面積当たりの個体数はやや多いかもしれない。ただし、この数は増えてきているのか、もしくは減ってきているのかは不明であり、今後の継続的な調査が求められる。

種類を識別できたカラスの割合をみると、2月4日、10日共にハシブトガラスが34%、ハシボソガラスが66%であり、ハシボソガラスの割合が大きかった。調査範囲の南側は市街地だが、北部は湿原、西部は牧草地がひろがり牧場もある。また海岸もあることから、全体的にハシボソガラ